



CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

June 2012

vol. 09

授業外の学習を支える 学習環境のデザインとは

教育推進部 岩崎千晶



いま、新しい能力が注目されている。PISA型能力(OECD2001)に代表される新しい能力は、高等教育分野では学士力(中央教育審議会2008)、社会人基礎力(経済産業省2006)、就職基礎能力(厚生労働省2004)などが挙げられ、このような新しい能力を培うことが現在の大学生に求められている。新しい能力では、PISA型に代表される3つの力を育成することの必要性が共通して述べられている。それは、自律的に学ぶこと、他者と協同して学ぶこと、道具を相互作用的に活用して学ぶことである。

このような力を育成するために、大学は何を提供すればよいのか。そのためにはいくつかの方法が考えられるが、そのひとつとしてアクティブ・ラーニングがある。アクティブ・ラーニングは、学習者同士の対話による協同的な学習や、学生自らの思考を促す能動的な学習を行い、学習者が他者と協同し自律的に学ぶことを指す。自律的な学習は授業内にとどまらず、授業外においても学習者が継続して学習することを重視している。そのため、授業外の学習環境をどう構築するべきなのはアクティブ・ラーニングを実施する上で非常に重要なファクターとなるのである。

このファクターとして注目されているのがラーニング・コモンズである。ラーニング・コモンズは、主に図

書館において学習者同士による協同的な学習、自律的な学習を支援する学習施設である。関西大学高槻ミューズキャンパスの中等部・高等部ライブラリーでは、すでにラーニング・コモンズを導入している。ライブラリーでは、ワイヤレスネットワークを構築しており、ノートPC40台、デスクトップPC15台、プリンター2台を備えている。ノートPCはバーコードが貼られており、図書貸出システムと連動して管理がされているため、利用状況も把握できる。この環境で学んだ高等部の3年生は、来年4月に関西大学へ初めて進学する。本学においても新しい能力の育成やアクティブ・ラーニングを推進するにあたり、授業外における学習者同士の協同、自律的な学習を支えるために、どのような学習環境を整備する必要があるのかを検討する時期にさしかかっているのではないだろうか。

しかし、授業外の学習を支えるための環境を作るといつても、場所の確保、図書館における座席数など、課題は多々ある。すべての課題を即座に解決することは難しいが、段階を踏み、身边にできるところから学生の授業外の学習を支える環境を生成していくことは、「関西大学が目指す考動力」つまり、「新しい能力」を身につけた学生を輩出する大学としての役目といえるのではないだろうか。

フォーラム・セミナー報告

「スタディスキルゼミ」・「知のナビゲーター」ワークショップを開催しました

午前の部は全学共通の初年次導入科目である「スタディスキルゼミ」を担当する教員たちによる情報交換、午後の部はそれに加えて文学部開講科目「知のナビゲーター」担当教員と、LA (Learning Assistant) の学生も交えたワークショップ、という二部構成のプログラムで、去る3月31日に標記の催しを実施いたしました。

午前の部は、20名弱の先生方にご参加いただきました。4～5名程度のグループに分かれてそれぞれの先生方の授業の様子をお話しいただいた後、課題やノウハウの共有を目的としたグループ・ディスカッション、さらにそれを踏まえての全体ディスカッション、という構成でプログラムは進行しました。スタディスキルゼミの成績の標準化をどのように実現してゆくか、学生のモチベーションをどう喚起するか、コースの中でどのレベルまで高度な問題群を扱うべきか、などさまざまなテーマについて意見交換がなされました。

午後の部は、ぐっと参加者が増えておよそ30名強。教室はかなりの大盛況となりました。

日時：3月31日(土)10:00～15:30
場所：第2学舎2号館 C301教室

企画と運営をしてくださったのは、文学部卒論ラボの3名の先生方です（金田純平特任准教授、林田定男特任助教、實淵洋次特任助教）。それぞれ教員1名、LA2名からなるグループで、こちらが用意した新聞記事の中から各自が一つを選び、その記事の背景の紹介、内容の要約、記事に対する意見、をまとめてプレゼンする、というワークを実施してもらいました。これは、昨年度に新規開講された「スタディスキルゼミ（新聞で学ぶ）」で行われた授業運営のメソッドの一つです。このワークの目的は、時事への関心をはぐくみながら、事実・感想・意見をはっきり区分した客観的な文章を構成するスキルをトレーニングする、ということにありました。また、学生が実際にどれくらいの作業を、どれくらいの時間・質でできるのかを、特に新規にスタディスキルゼミや知のナビゲーターを担当する先生方に、間近に見て知りたいだけの機会をご提供したい、という運営側の願いもありました。

教員向けのワークショップで、教員と学生が同じグループでいっしょに作業する、という形態はちょっと珍しいものだったかとは思いますが、ご参加くださった先生方にとって、本ワーク

ショップが4月からの授業作りのために少しでも何か役立つ素材となつたとすれば、運営側としては幸いです。

(教育推進部 須長一幸)



午後の部の一幕。
グループで議論する先生とLAたち。



午後の部の一幕。議論も白熱してきた様子です。

FD Caféを開催しました

4月21日、例年どおり“FD Café”（新任教員研修会）を開催しました。あまりの好天にOpen caféにした方がよかつたのではないかと迷いました。次回より選択肢の一つに加えたいと思います。昨年度より、新天地での授業を数回経てから開店した方が対話の内容にリアリティが添えられると（の意見を反映して、こちらの方がよいと）考え、この時期に開催することにしています。今後も、参加者、参加者OB・OGのご意見を反映してフレキシブルに対応したいと思います。

FD Caféは今まで次のようなコンセプトに導かれて開店してきました。すなわち、Faculty



リラックスした雰囲気の中でダイアローグを行なう
参加者

日時：4月21日(土)13:00～16:30
場所：第2学舎2号館 C505教室

【大学教員集団】が教育改善のために必要なこと〔能力・資質と限定的には書かない・言わない〕をDevelop〔開発・伸長〕するために、まずは教員間の意思の疎通・共有が求められるが、そのためには“Free Dialogue”が不可欠であり、それは私たちにとってはなくてはならぬ“Food & Drink”的なものです。折角、口にする機会に恵まれるのなら、美味しく、楽しく味わいたい、そんな場を何処かに持ちたい、ということです。今回は、ここに自分たちの所属する組織がどんなつながりあってほしいのか、私たちはそこにどれだけ関与できるのか、そんなことも考えていくかと“Future Design”もそっとコンセプトに加えることにしました。

MENUはアイスブレイクを兼ねたグループピニング、ミラーリングを用いた自己紹介、グループごとのダイアログ、グループ間の意見・情報を交換・共有するためのWorld Caféの定食に加え、今回はクリッカーパネルを用いての情報交換を前菜に、OBの片倉啓雄教授（化学生命工学部）からはメインディッシュとなる話題を提供

(教育推進部 三浦真琴)

教育開発支援センター 2012年度 プロジェクト紹介

TSネットワーク

TSネットワークは、Teaching AssistantとStudent Assistantの頭文字をとった名付けられたプロジェクトです。メンバーは、専任教員1名、事務職員3名で構成されています。本プロジェクトは、2005年度から試行的に実施している「TAを活用した授業」の実施結果を検証し、教育の質を向上させ、TA制度の実質化を目指すことをその目的としています。具体的には下記の2つの課題を検討することで、プロジェクトの目的を達成することを目指しています。

1) TA制度の実質化

TAの制度改革、TA制度に関する規程の策定

2) TAを活用した授業の質向上を目指した取り組み

TA研修の企画・運営、TA通信の発行等

1) TA制度の実質化

2011年度は、TAを活用する教員、TA、受講生への調査活動を行い、TA制度の評価をしました。その結果を『関西大学高等教育研究』第3号におきまして「関西大学における教育補助者を活用した活動、授業実践の動向分析—学部生・院生の教育力活用制度の全学展開に向けて—」として記し、成果と今後の課題について提言を行いました。ならびにTA以外の学生スタッフとしてピアサポートー、授業支援SA、ラーニングアシスタント（LA）の扱いや位置づけを紹介し、その整理をしました。

学部生・院生による教育力を学内で活用することの意義に関しては、同号におきまして「学びをサポートする学部生・院生の教育力の活用」として提言をしました。今年度は、これらの活動を基盤とし、TA制度を実質化させるために規程を策定していきたいと考えております。

全学ICT活用推進会議・ICT活用授業の普及活動

1) 全学ICT活用推進会議

本プロジェクトは学長からの要請で、全学的なICT活用に関する基本方針を策定することを目的に、本年度より3年間のプロジェクトとして立ち上がった、教職員10名からなるプロジェクトである。

本プロジェクトの使命は、「eラーニング/eポートフォリオ活用推進ワーキンググループ報告書」をふりかえり、先ず、以下の5点について本学全体のICT活用による教育の質的向上を目指し、それぞれの活動の目標と目的を明確にし、基本方針を策定することである。

本プロジェクトの活動内容構想

1. ICTを用いた教材の企画・開発・制作支援及び講習会・研修等の企画提案
2. ICTに関する各種システムの開発・拡充、及び運用管理についての提案（iTunesU等の外部リソースの活用も検討する）
3. ICTに関する学外諸団体との連携についての基本方針の提案
4. コンテンツの公開に関する法的・技術的な検討と実践的利用方法の提案
5. 全学的なICT教育への活用の提案および推進

2) ICT活用授業の普及活動

本プロジェクトは2011年度より始まったプロジェクトで、教育推進部教員2名と授業支援グループ職員3名からなる。本プロジェクトの使命は、これまでに整備・導入されたアクティブラーニングを促進する教育支援用ICT機器やシステム、及び、授業時間外学習を促進するためのインフラについて、全学レベルで啓蒙・普及をおこなうことである。これらの使命を実現するための具体的な活動内容構想は以下のとおりである。

本プロジェクトの活動内容構想

1. ICTリテラシー基準及び自己評価尺度の作成
2. 教育支援用ICT機器やシステム等の普及のためのワークショップ・講習会の開催
3. ICT活用事例カードの作成と配布
4. 教育支援用ICT機器の各種簡易利用マニュアルの作成と配布
5. 教材コンテンツ作成のためのアドバイス
6. ICT活用授業のためのコンシェルジュ・カードの作成と配布

昨年度に引き続き、既存の授業支援のためのICT機器やシステムの啓蒙および普及をランチョンセミナーやコンシェルジュ・カード等を通して推進していく。

(教育推進部 山本敏幸)

ライティング支援プロジェクト

「2位じゃダメなんでしょうか?」という発言に象徴される事業仕分けの話ははるか別世界の出来事だと眺めていたが、直接影響をうけることとなった。文学部で2010年度に採択された大学教育推進プログラムGP「文学士を実現化する学びの環境リンク」；卒論ラボ・スケール・カードの有機的な連携による「気づき」を促す仕組み作り」を始めとした他大学を含む全取り組みが2011年度いっぱいで中止となつたのである。

文学部のこの取り組みは、当初からGP終了後（平成25年度以降）は全学的な「ライティング」の取り組みとして発展的に展開する計画になつており、そうした中でGPの期間1年を残しての「仕分け」になってしまったことになる。

本学としてはこの難局に対して、将来的に全学展開する場合に担当することになると想定されていたCTLを中心とした教育推進部で対応を議論し、本来のGP最終年度である2012年度は、文学部のこれまでの取り組みを継承する部署としてCTL内部にあらたな研究プロジェクト「ライティング支援プロジェクト」を立ち上げることにした。こうした流れの中で紹介するときわめて消極的なプロジェクトに映るかもしれないが、実はその逆で、大学の取り組みとしては、学士力育成の文脈で極めて重要な位置づけとなっている。すなわち、ライティング（書く）力は、論理的思考力・批判的思考力、情報の取捨選択の力、表現力、文章力といった、大学での学びに必要



な諸能力を象徴した力だと考え、それを育てるプロジェクト、と位置づけているのである。

本年度は法人の理解も得て文学部の取り組みをもとにこれを全学展開すべく、文学部内に「ライティングラボ運営委員会（委員長：菅原慶乃准教授）」を設置し、同時にCTL内に「ライティング支援プロジェクト（プロジェクト代表：中澤務教授）」を開設して両側面から全学展開に向けての組織形成・運営にあたることになった。前期は主に文学部の取り組みの継続（写真は、第1学舎にあるライティングラボの一部屋）、後期からは全学展開に向けての諸準備に取り組むこととしている。組織の運営上、中澤教授にはCTLの専門委員の1人としても活躍いただき、CTLからも文学部の運営委員会に岩崎千晶助教が参画している。全学展開に向けてのライティング支援のための空間の確保や人材の確保等問題は山積しているが一歩一步前に進めています。

これに加えて、同様の取り組みをしている他大学や関連する諸機関との連携を視野に入れた活動の準備も進めている。

(教育開発支援センター長 田中俊也)

教育開発支援センター 構成員紹介



**センター長
田中俊也** (文学部教授)

昨年10月にセンター長に就任して以来、当センターをCTL（シーティーエル）と呼ぼう、と声をかけてきましたが、徐々に定着してきた感があります。ここでは高等教育機関としての大学での「教え・学び」に関わるすべてのことを扱います。関大CTLが世界スタンダードになっていくよう、専任教員を中心に関係者全員で努力を続けます。皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。



三浦真琴 (教育推進部教授)

勉強ではなく、学習、できることなら楽習を学生のハビトゥスにしたいと願っています。そのために教師集団の一員として何ができるのか、模索しています。是非、意見やアイデアの創出・交換・共有をしましょう。



**副センター長
山本敏幸** (教育推進部教授)

CTLの副センター長として、ICTを活用した教育の普及を中心に活動しています。

本年度は、ICT活用に関するプロジェクトを二つ担当しています。全学ICT活用推進会議では、本学のeラーニング、eポートフォリオの普及と対外的機関との対応方針を中心に、総論的な視点からの運営を心がけています。もうひとつのICT活用プロジェクトでは、既に学内に導入されている教育支援用ICTの活用普及活動をランチョンセミナー等でおこなっています。ご参加をお待ちしております。



須長一幸 (教育推進部准教授)

私は全学共通教育のコーディネーターを担当しており、特に「スタディスキルゼミ」のデザインに力を入れています。

スタディスキルゼミは、他学部の学生と積極的なコミュニケーションができる場として成長を続けています。13学部を擁する総合大学である本学で、学部を超えて全学の学生が交流できたら、本学のもつ「多様性」は大きな武器になると思いませんか？



岩崎千晶 (教育推進部助教)

所属当初は、TSネットワーク担当であった私ですが、現在ではICT活用授業の普及活動プロジェクト、ライティング支援プロジェクト、授業コンサルテーション、全学共通科目の見直しなど、幅広い分野を担当しております。昨年度は「初年次教育におけるアクティブ・ラーニング型授業デザインブック」を発刊しました。CTLにて配布しております!! ポジティブに日々精進也。



萩原恒夫 (授業支援グループ長)

「授業支援ステーション」では、授業前後の教員を補助する学生スタッフ「授業支援SA」が授業の質的向上を目指して日々活躍しています。また、今年度から障がいのある学生に対する修学支援チームを立ち上げました。ますます教員・学生へのサポートを充実させていく「授業支援ステーション」をぜひご活用ください。

専門委員 牧野由香里 (総合情報学部教授) 中澤 務 (文学部教授)

From CTL事務局

関西大学は、これまで支援を希望する学生に対して、各学部・研究科の窓口が個別に対応していました。2012年4月、障がいのある人もともに学べる大学を目指して、障がいのある学生に対する修学支援についての窓口として、「障がいのある学生に対する修学支援チーム」を設置し、全学的な修学支援体制を整えました。

同チームには、専属のコーディネーター、教職員に加え、点訳やノートテイク、パソコンテイクなどの事前研修を受講した学生支援スタッフが配置され、学内の関連組織と支援に関する連絡・調整を行なながら、障がいのある学生に対して組織的

なサポートを行っています。

私は、昨年まではボランティアセンター職員として、ボランティア活動を広めるという目的を持った学生スタッフの育成支援業務を行っていたのですが、この4月からは、障がいのある学生に対する修学支援業務にかかわらせていただくこととなりました。この支援活動がサポートを受ける側の学生の修学を支えるのみならず、サポートする側の学生にとっても大いなる学びとなっていることを日々実感しています。

私自身20数年前に教職を目指して学んでいた頃、学科の取り組みとして、障がいのある子どもさんたちと過ごす時間を持つことがあったことから、ノーマライゼーションを

当たり前のこととして感じていました。そういった自分自身の背景もあり、今この業務にかかわらせていただけることに不思議な縁を感じています。

障がいのある学生に対する修学支援においては、ICTの活用が不可欠であり、また、障がいのある学生の授業担任者の先生方と話し合いながら、教材を考え、伝え方を工夫するこの修学支援業務自体が、CTLで行われているFD活動のひとつ形であるのではないかと考えています。

障がいのある学生に対する修学支援チームの活動の理解者がさらに増え、本学におけるFD活動の拡がりに少しでも寄与できればと考えています。

(典)